

特集 新しい「教養」のゆくえ

古典や世界名作、科学的な知識などを収めた、子ども向けの「教養」の本は、かつて、全集や叢書などあるまじき形として形作られ、図書館や学校、家庭に普及していきました。しかし、本にふれる現場の状況や求められる価値観が変わり、とりわけネットの広がりとともに、いまや、即効性のある情報や知識が、個別的、断片的に届けられるようになってきました。そのような社会の中で、子どもたちに伝える「教養」の内容も表現方法も、変化を余議なくされています。

それでも、子どもたちに、蓄積された知識や文化を受け継いでいくことは、児童文学のひとつの意義であると考えます。本特集では、あらためて、子ども向け「教養」の本とはどういうものであったのか、そして、それは今どうなっているのかを確認し、内容・形態・伝える工夫なども含めて、子ども向け「教養」のゆくえを考えます。

